

インドネシアから世界へ 海を越えて夢をつかむ

オルガノ株式会社

技術生産部 エレクトロニクスグループ兼、
技術企画部 グローバル推進グループ

ジョヴァンディ・デワンタラ

JOEVANDI DEWANTARA さん

インドネシア生まれ。高校時代にアメリカ留学を経験し、奨学金を得て日本に留学。日本語学校を経て東京理科大学工学部工業化学科に入学。大学院を修了後、日本の総合水処理エンジニアリング会社、オルガノ株式会社に就職。技術開発本部エンジニアリングセンターを経て現在は、技術生産部エレクトロニクスグループ兼、技術企画部グローバル推進グループに所属。

2021年に東京理科大学工学部工業化学科を卒業し、2023年に大学院を修了したジョヴァンディ・デワンタラさん。総合水処理エンジニアリング会社に就職し、半導体工場で使用する超純水を製造する設備の設計、調達、施工、立ち上げに至る全プロセスを管理する仕事に従事している。入社2年目にグローバル推進グループに異動となり、最近では日本とアメリカを行き来する新たな挑戦に取り組んでいる。

彼は今、なぜ日本で働き、何を大切にしているのか。出身地インドネシアから日本へと渡り、理科大で過ごした日々、そして未来への思いを語っていただいた。

海外にあこがれていた子ども時代

ジョヴァンディさんはインドネシア・東ジャワ州のスラバヤに生まれ、小さな町バニユワンギで育った。近くには、神秘的な青い炎が立ち上ること知られるイジェン火山があり、外国人観光客も訪れる地域だ。幼いころから外国人を見ては「カッコいい！」とあこがれ、外国に行きたいと夢を抱いていた。しかし家庭は決して裕福ではなく、両親からは「海外に行きたいなら自分の力で行きなさい」と言われていたという。

「そう言われると逆に燃えるタイプなんです」と笑



うジョヴァンディさん。パソコンが欲しかったときも「自分の力でなんとかしなさい」と言われ、パソコンが景品のコンクールに挑戦して見事に勝ち取ったそう。高校進学でも奨学金を得て、地元を一人離れ、都心部のボーディングスクール(全寮制高校)に進学した。

そして高校3年生のとき、やはり奨学金を獲得し、1年間のアメリカ留学のチャンスを得る。

「未知のことを学ぶときはいつもワクワクする」というジョヴァンディさん。いっしょに留学した同級生の中には、食事が合わないなど、カルチャーショックに苦しむ人もいたが、ジョヴァンディさんはすぐにアメリカの生活に溶け込んだ。

インドネシアでは、英語は小学校から必須科目なので、英語にはさほど不安を抱いていなかったが、初日にハンバーガーショップで「チーズバーガー」が通じず、「こんな簡単な英語が通じないなんて！」と衝撃を受けた。「英語を話せないと生きていけない」と必死に学習。2カ月後には日常会話に困らないほど上達していた。

アメリカでは現地の学校に通った。履修科目は自分で選べるものも多く、自分は何をしたいのか、常に自己主張が求められる環境は新鮮だった。

「人が好き」というジョヴァンディさん、多国籍の



幼い頃、スーパーマーケット内の遊具で姉と遊ぶ。

留学生や、現地の生徒とも積極的に交流した。ホストファミリーとは、本当の家族のように深い絆を築いた。今でも海外に旅をするときは、当時の友人を訪ね、ホストファミリーとも親しい関係が続いている。

「あの時アメリカに行かなければ、今も私はインドネシアにいたかもしれません」と言うほど、1年間のアメリカ生活はジョヴァンディさんに大きな影響を与えた。何より大きかったのは、「この国の人はこうだ」と決めつけてはいけない、という気づきだ。実際に現地で人と触れ合うことで、自分がこれまでもっていた先入観ががらりと崩れていった。「何事も自分の目で確かめるまでは信じてはいけないと学びました」。それは今でも大事にしている考え方だ。

日本留学を決意した理由

アメリカから帰国し母国の高校を卒業後、次に目指したのは大学留学だった。「もっと世界を見てみたい」という気持ちが抑えられなかったからだ。アメリカやシンガポールの大学も候補に挙がったが、最終的に選んだのは日本。その理由はふたつあった。

ひとつは「生魚を食べてみたい」という好奇心。海に囲まれたインドネシアでも、新鮮な魚を生で食べる習慣はあまりなく、日本の食文化に強く惹かれたのだ。後日談だが、日本に来て実際に生魚を食べ、お寿司も大好きになったが、一番好きな寿司ネタは、魚ではなく玉子なのとか。

そしてもうひとつの理由は、日本の高い技術力。もともと理系が得意だったジョヴァンディさん、「理系分野を学ぶなら日本がいい」と考えた。技術を学んで将来は母国の発展に貢献したいという思いもあった。

もちろんこの時も奨学金制度に応募。見事採択され、日本に行くことが決まった。高校で地元を離れたときには大泣きし、アメリカ留学でも泣いた両親は、さすがにもうあきらめたのか、「好きにしろ」と送り



高校3年生のときにアメリカ留学。ホストファミリーが空港に迎えに来てくれた。

出してくれた。

最初の1年間は日本語学校でみっちり語学学習。ひらがな、カタカナ、漢字という三つの文字体系を覚えるのは大変だったが、その努力が大学生活を支える基盤となった。留学生や日本人の友達もでき、どの大学に進学すればいいか、情報を集めていった。理科大を知ったのはオープンキャンパスへの参加がきっかけ。模擬実験が楽しくて「こんなに楽しい授業が受けられるのか」と興味を持った。日本人の友人たちの評判も大変良かったことが決め手になった。

留学生入試に挑戦し、東京理科大学工学部工業化学科に見事合格。工学や環境・エネルギー分野に関心があった彼にとって、理科大は理想的な学びの場だった。

理科大での日々 ― 勉強と友情

「理科大は勉強が大変だと聞いていましたが、本当に大変でした」と振り返る。レポートはすべて日本語の手書き。さすがにすべての科目を日本語で書くのは難しく、交渉して英語で提出させてもらった科目もあったという。わからないことは先輩に聞いたり、先生の研究室に聞きに行ったりした。「どの先生もとても親切でいつも歓迎してくれ、心が温まりました」

語学にも興味があったジョヴァンディさん、中国語、韓国語、ロシア語やスペイン語などの授業にも参加。「人と本音でコミュニケーションをとるためには、語学は不可欠」と思っていたからだ。この頃には将来、グローバルに活躍することを意識していたのだろう。

多くの人と知り合いになりたかったので、授業以外の活動にも積極的に参加した。留学生との交流を目的としたインターナショナルラウンジにもよく訪れ、積



大学1年の頃、理科大の「シーズンスポーツ実習」で、初めてのスキー体験。



大学1年のときに英語プレゼンテーションコンテストに参加して、Top50 賞をもらった学科の同期と。



修士課程1年の頃、2020東京オリンピック・パラリンピックでボランティアとして活動。写真は、車いすバスケットボールの決勝戦。

積極的に日本人学生と交流し、多くの友人を得た。毎週末には学外のボランティア活動にも参加した。

「ボランティアによく参加したのは、何か世の中の役に立つことがしたいという気持ちが強かったからです。そのせいで、勉強はあまりしなかったかもしれませんが、もっと勉強しておけば……と少し後悔もありますが、勉強ばかりしていたら、今ほどたくさんの友達には出会えなかったと思います。友人や経験を得られたことは何よりの財産です」

ウィンタースポーツをしたことがなかったジョヴァンディさん、大学の授業でスキー合宿に行き、何度も転びながらもスキーを楽しんだことは良い思い出。

研究室とアルバイトで 日本で働く土台を築く

大学では永田研究室(永田衛男教授)に所属。光触媒を使って生活排水をきれいにし、同時に水素を取り出してクリーンエネルギーとして活用することを研究した。

「永田先生は、細かな指示をせず、やりたいことをやらせてくれた。それは楽なようですが、自分で何でも決めなければならないですし、失敗も自己責任。責任感やタイムマネジメント力、創造力が鍛えられました。自分も将来部下を持つようになったら永田先生のような指導者になりたいと思います」

その後、大学院に進み、同じ永田研究室で研究を継続した。生活費は奨学金で賄えたが、学費は自力で工面しなければならず、通訳やTA(ティーチングアシスタント)、日本企業でのアルバイトも経験した。「アルバイトで時間に追われ、思うように研究できなかったことは心残りですが、アルバイトを通じて日本の職場文化を知ることができ、就職後に非常に役立ちました」

社会人としての挑戦

卒業後は、せっかく日本で様々な技術の理論・原理を学んだので、引き続きそれらの応用も身につけたいと思い、日本で就職することを決意した。ジョヴァンディさんがこだわったのは、「グローバルに活躍できるかどうか」。業界や分野にはさほどこだわりはなかった。

3社から内定をいただいたが、現在の会社に決めたのは「自分が貢献できる余地が大きい」と感じたから。他社はすでに業界ナンバーワンの大手だったが、入社した会社は、伸びしろがあり、会社と共に自分も成長できると感じたのだ。環境問題に関わる事業を展開していた点も、これから絶対に必要となる分野だと思い、興味をもった。

入社後は、日々、新しいことを学び、念願のグローバル推進グループへの異動もかなった。これまでの国内プロジェクトに加え、今後は日本とアメリカを中心に、台湾や中国、東南アジアとも行き来しながら、国際的な水処理プロジェクトを支えることになる。さらに未開拓の国への進出も会社は目指していて、その時にはぜひ自分が担当できるようになりたいと意気込んでいる。

「日本は大好きですが、他の国のことも知りたい。日本の良さを海外に伝えたいし、逆に海外の良い面を日本に持ち込みたい。もちろん、生まれ故郷のインドネシアのすばらしさについても伝えていきたいです」

持ち前のチャレンジ精神と 日本で得た良い面を活かしたい

ジョヴァンディさんに、日本のどこが好きか聞いてみた。

「控えめで周囲を気遣う文化ですね。誰一人割り込

もうとせず、エスカレーターで整然と並ぶ姿には驚きました。何もかも整っていてきれいなこと、コンビニの食べ物が美味しくて便利、ウォシュレットなど生活を快適にする技術も素晴らしいと思います」

日本の影響で、「自分も変わったな」と感じることもある。

「私は周囲に遠慮することなく興味を持ったことはとにかく挑戦してきました。でも、日本に来てからは、いろいろな場面で周囲に気を使ったり遠慮するようになりました」

以前のように自己主張ばかりしていた自分よりも今の自分のほうがいいと思う反面、かつての「失敗を恐れず何にでもチャレンジする」精神が弱まったのかなと残念に思うこともあるそうだ。

「慎重にモノゴトを進めたり人の気持ちに配慮できるようになったことは良かったと思いますが、グローバルな舞台で仕事をするときには、遠慮をしていたら負けてしまう。日本で身についた良い面を活かしつつ、本来のチャレンジ精神を発揮して、思い切っているいろいろなことに挑戦していきたいです」

高校生へのメッセージ

高校生に向けてメッセージをいただいた。

「外国人と仲良くなりたいと思っている高校生も多いと思います。外国人のほうも日本人と仲良くなりたいんです。でも、すでにできている友人同士の輪には入りにくい。だから日本人のほうから『輪に入ってきていいよ、私たちはあなたを歓迎しているよ』という合図を出してくれるとうれしいです」

また、英語学習についてはこう語る。

「大学時代に友人から『語学で大事なものは単語？文法？』とよく聞かれましたが、一番大事なことは、まず『恥ずかしい』という気持ちをなくすことです。日本人はまじめなので、『完璧な文章しか口にしてはいけない』と思っている人が多い。でも間違っても大



大学院修了式の後、初めて来日した家族と。

丈夫。とにかく話してみることが上達への一番の近道です」

これから挑戦を続けたい

ジョヴァンディさんが日本に来て、11年目になる。それからさらに10年後は？「日本を拠点としながら世界的に活躍したい」とジョヴァンディさん。今も暇があれば語学の勉強をし、「将来は5か国語をすらすら話せるようになって、様々な国や地域で活躍する人間になっていると思います」そのさらに先は、「もしかしたら、インドネシアに帰って、国の抱える環境問題や教育格差の問題解決に貢献しているかもしれません」

インドネシアの小さな町から世界へと飛び立ち、自分のやりたいことに挑戦してきたジョヴァンディさん。逆境の中でも挑戦を忘れない彼の生き方は、私たちに勇気を与えてくれる。

取材を終えて

とても明るく、日本語が上手！というのが第一印象。田舎に生まれ育ったことや経済的な環境をものともせず、海外に飛び出し、やりたいことにどんどん挑戦していく姿にこちらも勇気をもらえる。「もっと勉強すればよかった」というのは謙遜だろう。在学中に得た語学力や様々な体験、培ったネットワークを生かして今後さらに活動の幅を広げていくことだろう。

(フリーライター／石井栄子)